



愛川ふれあいの村 今月の風景

2019年7月 自然のたより

村にみのある果実を求めてきたのか、サルやシカ、アナグマ、リスなどの動物が顔を見せた7月。リスはせっせと巣材を集めていました。県花であるヤマユリがたくさんの花をつけています。雨が多いため、10種類以上のキノコが生えたり、クワガタムシやトンボにも出会えました。気候の影響か、例年よりも1か月遅くタイサンボクが咲きました。あと少しで羽がはえそろう若い鳥も見られ、命のバトンが繋がれていると感じます。



巣材を集めるニホンリス



若いヤブサメ



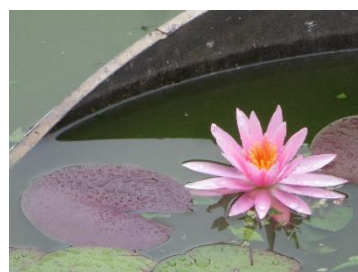
ヤマユリ



オカトラノオ



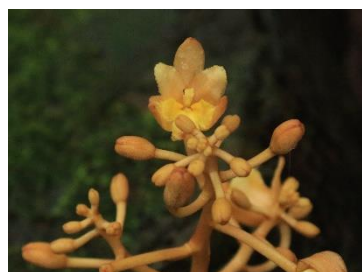
エサキモンキツノカメムシ



食堂前のスイレン



オニヤンマとコオニヤンマ



ツチアケビ



タイサンボク



コカブトムシ



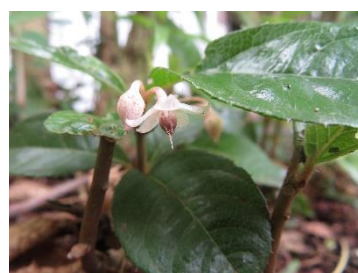
シモツケ



ハナオチバタケ



若いモズ



ヤブコウジ (十両)



それは食べられないよ

トピックス★サツマイモの草取り★

7月といえば、サツマイモ畑の草取り。伊勢原にある芋畑には、6月初旬に500本の苗を植えた。

雑草の成長はサツマイモより早く、すくすくと伸びる。うっかりしていると、芋づるを覆いつくし雑草畑になってしまう。特に厄介な草はシロザだ。若葉のうちには、おひたしにして食べるとおいしいと、本でも紹介されている程だが、放っておくとみるみる生長し、人の背丈を越えてくる。そうになると幹が硬く、もはや樹木という風情だ。

芋畑の草取りは若葉の頃に限る。しかも根ごと引き抜くのがコツだ。切ってしまうとは、すぐに復活する。雑草の生命力は見事なものだ。根から断つ…これ以外に安心はできない。

夏の炎天下の草取りは、おおむね苦痛のようだが、私にとっては懐かしさを伴って楽しい作業だ。九州宮崎県の南端・都井岬の袂で小学生時代を過ごした私と兄は、夏休みになると芋畑の草取りが午前中のノルマだった。炎天下に麦わら帽子をかぶり、ノルマを果たすことに夢中になった。済むと遠い道を急ぎ帰り、海へ向かう。磯すみ(素潜り)が最高の楽しみだった。小学生だった私と兄は、2人で大人1人分を採るのだと励んだ。

今でも芋の草取りをしていると、あの頃の感触がよみがえり、懐かしく楽しくなる。(河野)



食べごろの
シロザ →

生き物 ★コオニユリ★

県花『ヤマユリ』は村の所々で見事な白色の大輪を咲かせ甘い香を漂わせています。対照的にオレンジ色の小さい花が下向きに咲いているのが『コオニユリ』です。コオニユリの鱗茎は“ゆり根”として古くから食用や薬草に利用されてきました。ゆり根は、一見するとニンニクのような形ですが、ホクホクした食感で甘みとホロ苦さが楽しめます。お正月料理や茶わん蒸し等で使われます。村のコオニユリは食べずにゆり根を植えて育てたもので、まさかこんな美しい花が咲くとは思いませんでした。食用になるまで何年もかかるゆり根。食べずに花を楽しみたいです。

(菅原)



旬 ★ヤマモモ★

梅雨に入り、じめじめとした日々が続いていますが、雨に負けじと収穫の時期を迎えた果物があります。それが、ヤマモモです。

実が赤黒くなり始めたら食べ頃ですが、雨が天敵で傷みやすく、実がすぐ落ちてしまうため、収穫の時期は非常に短いです。

今年、ふれあいの村ではたくさんの実がなっていて、昔、友人と食べて舌がどれだけ紫色になるか競ったのを思い出しました。色々な食材の旬が曖昧になってきている今、まさに季節を感じる『旬』な果物だと言えるでしょう。(大田)



来月の見どころ

神秘的なアブラゼミの羽化

盛夏、セミたちの羽化が最盛期を迎え木々の枝先に抜け殻が目立つようになってくる。抜け殻も多いが、その中に重そうに歩くアブラゼミの幼虫の姿を見かけることがある。暗い土の中で二〜五年の歳月を過ごしやっと地上に現れてきたのだ。一歩一歩、木に爪をたてながらしっかりとそして慎重に登っていく姿を見ていると思わず頑張れと応援したくなる。

午後の八時くらいに食堂の前を通ることがあれば、是非メタセコイアの木を見てほしい。時には近くにある小さなエノキの枝先や道路にも鎧のような頑丈な殻を被った幼虫たちが歩いているかもしれない。そんな幼虫を見つけたら、少しの時間立ち止まって幼虫たちが脱皮する神秘的な瞬間を見てほしい。

ここと決めた場所を選ぶと葉の先で向きを変え葉の表まで届く爪をたて静止する。背中が割れて初めはアタマから逆さにぶら下がりじっと動かなくなる(右側のセミ)。そして血液が頭の方まで回ると力強く起き上がり静止する(左側のセミ)。

夜でなければ見ることのできる神秘的な生命活動に子どもたちはきっと感動することと思う。(吉田)



▲アブラゼミの羽化